

ロクでなしと悪の敵

ジャガルナ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

最期の光景は、鋼の英雄の雄々しき背中。かくして少年は未来に向かって墜落する。

——そう、すべては明日の光を目指すため。

# 目次

プロローグ	1
アルザーノ魔術学院編	
早朝の鍛錬	7
早朝の鍛錬：裏	11

## プロローグ

最期の光景は地獄だった。

逃げる場所なき焦熱地獄。止むことのない断末魔の合唱。目の前で塵のように転がっている元軍人が言うには魔王と呼ばれる生体兵器が原因らしいが、そんなことなどはや死に行く自分にとってはどうでもいいし、どうにもできない。

四肢は動かず、全身から命が流れ出ていく。視界の端に見える右腕が灼熱に焼かれているというのに、もはや熱さも感じない。

死だ。ただ冷たい死だけがここにある。それだけが今の自分を満たす全てで、つまるところ詰みだった。

——そう、彼はもうすぐ死ぬ。その結末は変わらないし、変えられない。現在の医療技術では彼の傷は治せない。

「この傷は——間に合わなかったか。」

故にこそ、かの英雄は現れる。救えなかった誰かに、せめてもの安寧をと。声音に滲むのはこの惨劇を引き起こした2体の魔王への極大の憎悪と赫怒の念。そしてなによりも不甲斐ない自身への嘲りだった。

揺らめく炎に照らされた金髪、顔を斜めに走る傷跡、そしてなによりも激烈な光の意志で輝く両眼。鋼の英雄、法の番人、始まりの星辰者、英雄譚——アドラーの民が諸手を上げて喝采する、悪の敵。そう、彼こそは——

「クリストファー・ヴァルゼライド総統・・・？」

その自分の掠れた呟きが聞こえたのか、彼はその鉄面皮をほんの少しだけ崩して、こちらを労わる様に見つめた。その表情が、誰よりもなによりも優しく、悲しくて、雄々しくて。

なんでもっと早く来てくれなかったんだ、どうして自分がこんな目に。そんなつまらない感情は、一切合切光に灼かれて消滅した。だって今日の前にいる彼は、見ず知らずの、消え行く自分の命のために、こんなにも怒ってくれている。こんなにも悲しんでくれている。その感情が、この地獄ではあまりにも尊く見えたから。

「助けられず、すまない。すべては俺の至らなさだ。罵ってくれて構わない。恨んでくれて構わない。だが君の無念は俺が晴らすと、それだけはここに誓おう。必ずだ。」

義憤と悲哀の混ざった声音で紡がれたのは紛れもない宣誓だ。彼は自分のために戦ってくれると、自分の恨みを受け止めてでもなお、自分のために戦い勝って見せると。そう光の英雄は言ってくれたのだ。

ならばこそ、もはやなんの憂いもない。ここで死ぬことの恐怖など、もはや気にもなりはしない。今の自分を満たすのは歓喜。ただそれだけだし、それ以外はいらぬ。冥土の土産には十分すぎるものを貰ったから。

ああ、けれど。もし次があるのなら――

「ぼくも、あなたのようにになりたい・・・。」

燃える街に消えていく英雄の背を見つめながら、少年の意識は消滅

していく。五体は灰に、精神は冥府の奥底へと墜ちていく。完全なる生命の終焉を迎え、また一人焦熱地獄へ散っていく。

——そしてだからこそ、条件はここに揃う。運命が射止めた生贄は、輪廻の車輪へ組み込まれ、別天地への新生を果たす。その身に憧憬の具現たる炎雷を宿して。

☆☆☆

過去からいまへと回帰する。

眼を開ければそこにいるのはいつも通り白衣を纏った塵屑でもだった。小汚い痩せぎすの男であったり、ヒステリックで神経質な女だったり。物心付いた時から俺はここにいて、物心付いた時から俺は弄られていた。

ここは実験場だ。天の智慧だとかいう外道共が汗水たらして人間の尊厳を貶める実験場。およそ考えうる限りの地獄が、ここにあった。

俺より前にいた子供達は次々と死んでいった。ここに集められるのは身寄りのない子供ばかりであり、死んでも誰も困らないからと、いつか男が言っていた記憶がある。死んだ子供達は、実験のデータを取るためにネクロマンサーに押し付けるとも。

ここに逃げ場など一切ない。死んでもその体は、死は、尊厳は。余すところなく汚され踏み躪られる。

反逆などまず思いつかない。彼ら子供に、魔術という超常の術を扱う大人に抗う術などありはしないし、そもそも暗示で反骨心すら叩き折られる。——俺以外は。

今も昔も、俺を正気でいさせてくれるのはあの日願った鋼の願望。灼き尽くさんばかりの光を胸に抱く限り、俺は決して狂いはしない。

「心臓に埋め込んだオリハルコンの経過はどうだ？」

「完全に同化しています。アダマントイト製の発動体も完成したと報告が。」

「そうか・・・くひ、ひはは、ひはははははは！やった、やったぞ！まさしく世紀の大発明だ！ああ大導師様見ておられますか！我々は！私は！遂にやり遂げました！星を駆る／借るもの———エスペラント星辰奏者の完成です！これでもはや、我らに敵はない！」

狂ったように笑う男の声が煩わしい。怒りで血液が沸騰しそうだ。

そんなにも嬉しいか、なんの罪もない子供を塵のように消費したことが。

そんなにも嬉しいか、俺のような何かを殺すことしかできない兵器を生み出したことが。

そんなにも嬉しいか、その大導師様とやらの役に立てることが。

そんなにもそんなにもそんなにも———どうして、そんなにも、救えないんだお前たちは。

赫怒の炎が心胆まで巡っていく。断罪の雷霆が魔術と魔薬に侵された脳を貫き覚醒を促す。

悪を許せないのだろうか？———ああ許せない。

悪を滅ぼしたいのだろうか？——ああ滅ぼしたい。

——今を生きたいのだろうか？——ああ、生きたいさ当然だ。生きて俺はこいつらを、滅ぼさなければならぬのだから！

たとえこの身があの日在地獄へ墜ちようと、こいつらのような塵屑を滅ぼすその日まで、決して止まることなど有り得ない！ああそうだと。すべては——

「——明日の光を掴むために」

目が眩むような宣誓と共に身を起こし、最期まで笑い続けた男の首をへし折った。混乱に陥るやつらの間を身を擲つ様に走り抜け、その先にある一振りの刀を掴んだ。瞬間、胸が燃え上がる様に熱くなる。同時に、脳の中で言葉が次から次へと浮かび上がって止まらない。そしてそれこそが今の自分になにより必要なものだと思いで理解して、キーとなるその聖句ランゲージを口にした。

「天昇せよ、我が守護星——鋼の恒星ほむらを掲げるがためッ！」

故にこれにて序章は終わり。英雄譚が幕を上げる。胸にあの日の憧憬を抱え、地獄にこそ輝く冥府魔道の雷神が、産声をあげて新生した。

☆☆☆

「どういうことだ・・・？どいつもこいつも死んでやがる。気をつけろ白犬。まだどこかにこれを引き起こしたやつがいるかもしれねえ。」



「うん、もちろんだよ・・・っグレン君！あそこ！誰かが・・・ううん子供！子供が二人いる！」

「おいッ！お前ら大丈夫か!?クソッ意識がねえのか・・・白犬！そっちのガキ持て！こっちのガキは応急手当だけじゃ間に合わねえ！医者に見せねえと・・・！」

「急ごう、グレン君！——大丈夫、君たち二人は絶対に助けて見せるから。だから君たちも頑張つて。どうか生きることが諦めないで・・・！」

## アルザーノ魔術学院編

### 早朝の鍛錬

俺の朝は日の出に始まる。未だに深い眠りの中にいる義妹を起こさぬように静かにベッドから抜けだし、水分補給用の水と手拭、木刀を持って家を出る。

まずは軽くフジテの街を5周ジョギング。道中、日が出て浅いというのにすでに仕事場へと向かう大人たちと挨拶を交わしながら体を温める程度に走っていく。最後の一周は仕上げとして少しギアを上げ、郊外にある丘を駆け上がる。

丘の頂上にはベンチが二つほどあるだけで開けているため木刀を振り回すのには丁度いい。妹が言うには隠れた夜景スポットらしいが、日も出たばかりの早朝なので当然カップルなどいるわけもなく、誰も座っていないベンチに水と手拭を置いて木刀を構えた。

かつていた実験場では戦闘訓練とは名ばかりのモルモット同士の殺し合いが度々行われていた。そのため、仰ぐべき師など居るはずもなく、剣術も、体捌きもなにもかもが我流であり独学だ。

ただ一つ確かなことは、自身が扱う剣術は守る剣ではなく攻める剣、もつと言うのなら殺すための剣だ。極論、剣術は人を殺す技術であり、お行儀のよい極東の剣道とは違う。あれは礼節を重んじる面が強いため、こと殺し合いの場においては倫理観や余計な感情に邪魔されやすい。

だがあちらはあちらで訓練する型は合理的だ。お行儀の良さ故に基本に忠実。先人の積み重ねた技術は年月を経て研ぎ澄まされるのは剣術も剣道も同じ。

かつて暗殺チームに同伴して極東へ赴いた時、道場で稽古を見たことがある。その風景を思い出しながら、いつも通り木刀の素振りを始めた。

☆☆☆

「ふっ……ふっ……！」

振る。振る。振る。一心不乱に、されどその所作は淀みなく。剣の握りを体に染み込ませるように、剣先までも体と一体化させるように。

額から流れる汗が眼に入るが構いやしない、振り続ける。それが己に必要なことだとにより理解しているから。

「ふっ……ふっ……！」

そもそも俺は自身のこの力をあまり使う気はない。星辰奏者（エスペラント）としての力のはつきり言って化外の力だ。なにせこの世のものではなく、疎ましい下劣畜生の産物でしかないのだから。

世界の裏側——悪魔共の巢食う魔界の、その空气中に漂う禍々しい魔力。それを心臓と同化したオリハルコンという特殊な金属を介して取り込むことで俺は星辰奏者足り得ている。そして無論、そんな力に普通の人間は耐えられるわけもなく、故にこそ俺の体にはその負荷に耐えられるだけの調整が施されている。

無茶に無茶を重ねただけあって俺の寿命はもって30歳ほどまでだろうが、そこは大した問題ではない。元より何歳までであろうと、

俺は最後まで生き足掻くし生き抜くつもりだ。

問題は、この力が余りに強すぎるといふものだ。過ぎたる力は不幸しか招かない。自分を英雄などと思ったことは一度もないが、強大な力を持つという意味では変わらない。

そして英雄の最期はいつだって悲劇的だ。裏切り、姦計、騙し討ち。例を上げれば限がない。そんなつまらない最期を遂げるなど有り得ないし、これまで積み重ねた犠牲者達に対して余りに不義理、余りに不誠実な事だろう。

大きすぎる力は民衆に安心ではなくむしろ恐怖を抱かせるし、なにより自分の慢心の原因にもなる。それで基礎を疎かにしてしまえば必ずどこかで檻樓が出てしまうものだ。

故にこそ、俺は星辰奏者ではなく、ただの剣士として鍛錬を積んでいるのだ。無論あちらの鍛錬とてかかさないが、比率は断然剣術に傾いている。勝利のためならば手段など選ばないが、手札というのはひけらかしては意味がない。星光を使わずに済むのなら、それが一番良いに決まっている。

努力が報われる保証などこの世のどこにもありはしないが、そもそも努力をしなければ報う報われないという前提にも立てない。報われないからと言って、無駄な努力など一切ないのだし、結局のところやっておいて損な努力がないことは確かだろう。役に立つ保証がないのと同じく、役に立たない保証もまたないのだから。

「ふっ……ふう。」

ぶん、と風切り音の後、素振りを止めて構えを解き木刀を下ろす。気付けば始めた頃よりもだいぶ太陽は昇っていたようで、今から帰っ

て準備をすれば学院の始業時間に間に合う時間だ。

——そう、学院。つまりは今の俺の肩書は学生であり、魔術師見習いというわけだ。身寄りのなかった俺と妹が学生になるのは少々面倒なことではあったが、勤め先ともいえる上司と、恩人の保護者に手を回してもらえたおかげで今の立場に収まる事が出来た。

どちらかと言えば魔術に対して正の感情を持っていないという俺ではあるが、良くも悪くも魔術は簡単に敵を殺せるものだ。塵を殺す手段の一つになるのだから、俺の心情など些細なもの。多少の嫌悪など軽く飲み干すくらいはどうかということもない。

あくまで俺は悪の敵。必要とあらば非道に手を染めることなど厭わないし、手段など選ぶべきではない。正義の味方でもなく、ましてや英雄ですらない俺が、手段を選ばない悪を相手に手を尽くさず勝てるなどと、思いあがるのも甚だしい。分を弁えろよ、劣等だろうがこの身など。

——すべては悪を滅ぼすため。

——誰かの涙を笑顔に変えるため。

——そしてあの日望んだ鋼の英雄。その背に近付きたいがために。

「そうとも、故にこそ俺はここにいる。滅悪の雷火、なおも潰えず——  
—死の光はここにある。ならば後は進むだけだ。どこまでも、前へ前へと、な。」

## 早朝の鍛錬：裏

有体に言つて、そこは地獄だった。

死体が無造作に打ち捨てられ、どこに踏み出しても肉を踏みつける感触がする。腸を踏みつけてぶちゆり、という音を立て中身が飛び出るが、それを不快に思うことなどもはやない。

あまりに無惨、あまりに凄惨。此処に至つて倫理観など持ち合わせたものなどはや一人もおらず、そんなものを持つやつから死んでいく。そして事実、初めは数百人いたものも、いまや二人を残して物言わぬ死体へとなり果てた。

だというのに、まだ敵は生きている。それは即ち、数百対一の絶望的差を覆し続けたということに他ならず、その戦闘論理には敵ながら天晴れと言わざるを得ない——わけがない。

人を殺して、なにが凄い、だ。なにが天晴れ、だ。ふぎけるなよ塵屑が。極論ただの殺人鬼でしかないだろうが、そんなことが誇らしいとか馬鹿じゃないのか貴様らは。

赫怒の炎が揺らめいて空間を歪めていく。激烈な意志それ自体が現実世界へ黒雷として現出する。慈悲も逡巡もありはせず、ただただ殺意に痺れていた。

「さあ、後は僕と君だけだ。グレンはどうやらリタイアらしい。」

「そのようだな。だが俺一人だろうが、やることは変わらん。貴様を殺す。ただそれのみだ。」

「——ああ。愚問だったね、失礼。」

片や人工天使を従えた鍊金術師<sup>アルケミスト</sup>。

片や刀を携え、その身に炎を纏った地獄<sup>ヘル</sup>の審判<sup>ジュース</sup>。

正義を謳う鍊金術師は笑う。ああどうかその輝き（正義）をぼくに示してくれと声高々に叫んで止まず、五体が絶頂して止まらない。彼は真実狂<sup>マニアク</sup>していて、もはやどうしようもないほどに彼は自分が正義だと信じて疑うこともしない。そしてそれ故に、彼はどこまでも救えない。

断罪を謳う地獄の審判は猛り狂う。知るか黙れよ貴様の正義など心の底からどうでもいいんだと、声高々に吠えて止まず、流れる血が沸騰して紅い蒸気が止まらない。彼もまた、ただただ憤怒に身を攫<sup>さら</sup>して怒りに狂っていると言っている。背後で草原の姫の亡骸を掻き抱いて慟哭する愚者の事も、自身に課せられた任務の事もなにもかも忘れて赫怒に身を任せるそのさまは、やはり絶望的なまでに救えない。

両者の背後に広がる轢殺の轍。それは即ち敗者の残骸で、あるいは英雄譚の礎だ。どうしようもないほどに救えない二人の男と時と場所を同じくしたという不幸。言ってしまうえば、彼らはただただ不幸でタイミングが悪かっただけの被害者でしかなかった。

——いついかなる時代も、犠牲なくして英雄は生まれず、悲劇なくして正義は謳えず、敵無くして勝利もまたない。古来連綿と受け継がれてきた残酷なまでの戦場の理は、この瞬間をも絡め取っている。計算による未来予知すら可能とする鍊金術師も、意志一つで現実を超越する光の奴隷も、その理からは逃れられない。

だがそんなことすら今の二人には些細なことで、彼らはただただ眼

前の敵を滅ぼさんと息を巻く。天使が剣と盾を構え、主の敵を討滅せんとその身に威光を滾らせる。地獄の審判もまた刀を構え、眼前の畜生を断罪せんとその身に冥府の雷を迸らせた。

殺意と赫怒が世界を満たす。あとはもう、ただただ己が殺意で自らの敵を殺し、潰し、消し去るのみ――

「勝つのは俺だ――」

「いいや、僕さ――」

☆☆☆

「また、あの夢。」

現実へと回帰する。

柔らかな毛布から身を起こし、頭を二、三度振るう。そのたび、血のように赤い赤髪が視界を塞ぐが、今は目に優しくない自分の髪がありがたかった。おかげで、夢の事を幾分か忘れられた。――もつとも、それも完全な忘却には及ばないが。

「ほんと、勘弁してほしいよ。」

言いながら、表情に浮かんでいるのは嫌悪感を含んだ苦笑いだ。過去の件で義兄と霊的に繋がって以来、こうして兄の過去を夢に見る。そしてそのたびに、光に灼かれて私が私でなくなっていく実感がある。



自我を保とうとしてはいるが、なにせ競う相手はあの義兄だ。不撓不屈が肉体を持ち、正しいことを正しい時に正しいやり方で当然のよう出来る人。義理とはいえ兄弟としてなら兄以上の優良物件など存在しないと断言できるが、しかし同時に人間として兄以上の異常者など存在しないとも断言できる。

あの人は終わっている。人として正しくない生物のくせして、地上に生きる人間の誰よりも正しいことを出来てしまうのだから、そのやるせなさもひとしおだ。

「もし、ファウスト義兄さんがああじゃなかったら——」

ああじゃなかったら、どうなのだろうか。答えは決まっている。私は今、生きてはいないだろう。

あの日実験場で義兄に救われなのまま、その他の子供たちと同じように、塵のように消費されていたはずだ。故にこそ、私は彼を尊敬しているし感謝もしている。その気持ちは本物だ、嘘などでは断じてない。

だがそれでも——

「私じゃ、義兄さんみたいにはなれないよ。正しいことは痛いし、辛いし、報われる保証なんてどこにもない。頑張れば何とか出来るなんて、そんなの義兄さん達みたいな人たちだけだよ。出来ない人は、どうやったって出来ないんだから。」

声音に滲むのは自身への嘲笑。ああまたそうやって言い訳を並べ立てて、無理だ出来ない諦めよう？それが気持ちいいことだから、欲に流されるのは人間だから仕方がない？我ながら、本当に反吐が出るくらいに卑屈で矮小で墮落してる。

こんな女があの人義妹？やめてくれよ恥ずかしい、同じ姓を名乗るなんて情けなさとし訳なさとし恐ろしさで脳味噌が弾けてしまっそうだ。私のような塵屑は、やはりあの日に死ねば良かった――

「ああ、もう。また変な方向に。」

言って、思い切り頬を叩く。余りの痛みに跳び上がったが、思考はどうやら落ち着いた。きつと頬は林檎みたいに赤くなっているだらうけれど、コラテラルダメージというやつだろう。さっさと起きて朝御飯の支度をしよう。きつと義兄も、もうすぐ日課から帰ってくる。

「よっころせつと。」

そうして、中年男性のような声と共に毛布を蹴飛ばし、ベッドから抜けだした。

――窓の隙間から私を照らす太陽は、今日も忌々しいくらいに、私を焦がす勢いで、燦然と輝いていた――